

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

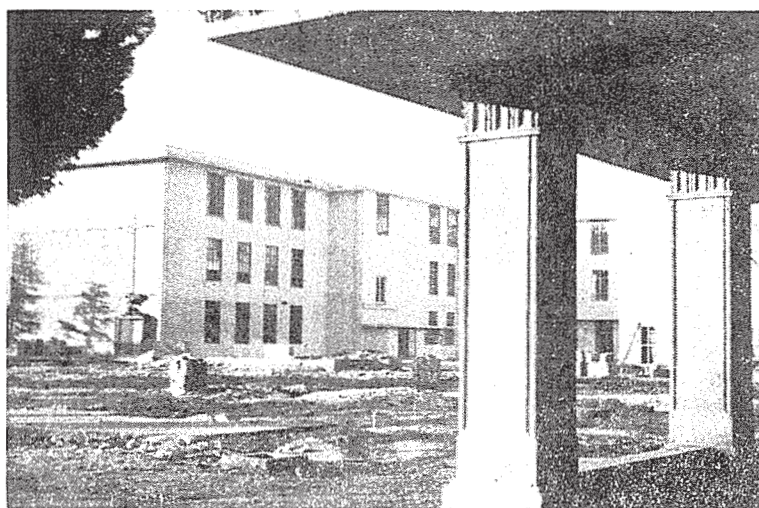
Osaka, Jan. 15th, 1955. No. 275.

關西大學學報

第 2 7 5 号

昭和 30 年 1 月

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
通巻第二七五号



図書館玄関より法・文新学会を望む

關西大學學報局

昭和三十年の新春を迎え、年頭にあたり先づお喜び申し上げます。

さて、おそらく誰もが、それぞれ何かの意味で今年こそはと年頭にあたり、大なり小なり所懐をいだくことでありましょう。それと同じように大学もまた、大学としての抱負をいだくものとおもいます。

我が関西大学は創立以来、伝統ある大学の教育政策を堅持して、常に学問の発展と時代の進運とに即応する教学の実を挙げ来たり、その研究及び教育成果の顕著なることは誠に御同慶のいたりにたえません。かえりみすれば、昨年は学部研究施設の充実、千里山法文学舎等教育施設の新・改築等を実施いたしました。更に本年は研究及び教育機関としての大学が飛躍的に発展するよう、努力したいと存じます。

殊に本昭和三十年は、本学が関西法律学校として創設された明治十九年より数えて、七十周年に当たります。憶えば、創設当初とくらべますと、現在の関西

創立七十周年の新年を迎えて

白川朋吉

大学の偉容は誠に隔世の感があります。これ皆、先輩諸氏の優れたる見識とみなみならぬ努力の賜物でありまして、今日私共の敬服感謝措くあたはざるところで、現在の大学を担ない、発展する将来の大学の礎を築くべき私共の責務の重大なるを痛感するのであります。

創立七十年の大学の歴史は、光輝ある発展の歴史であります。が、大学の歴史的生命からみすれば、過去の大学の歴史を光輝あらしめるものは現在の大学であり、現在の大学をして意義あらしめるのは、まさに未来の大学でなければならぬとおもいます。ひそかに私はこのことをおもうと、日に更たにまた日々に新たに発展し行く大学を見ながら、且つは喜び、且つは大学教育政策の計画と実施とに遺憾なきよう、自ら鞭撻しつつ重責を全うしたいと念願するばかりであります。

願わくば、役員諸氏、大学関係者、学生諸君、校友諸氏におかれまして、母校のため、明日の関西大学のため、能う限りの御尽力と御援助の程を、お願いする次第であります。
(理事長)

我が関西大学が私学の雄として今日の如き威容を備えつゝあるのは、七十年の長い歳月の間に数多くの先輩識士が、様々な批判の嵐の中に立つて忍苦と敢闘の歴史を綴り来つた賜物である。その苦心たるや筆舌に尽し難い。

その貴い辛苦の姿は、私の浅い経験の中にも切実に身を以つて体験し、深甚なる感謝と敬意を捧げ、母校の為により一層の努力を致すことを年頭に当り固く決意するものである。

矢野文雄

この祝賀すべき創立七十周年の新春にあたり紙上を藉りて特に在学生諸君に強く要望したい。大学発展の為には内容充実が最大の急務であることは論をまたないが、その中特に在学生の全員が、一人残らず自己を批判し、再思三省し、うちたてた理想に向つて寸秒を惜んで力強く己が道を堂々と歩むことより外にないものである。「我れ如何にあるべきか」を認識すべきだと思う。理事者の献身的努力、学徳共に高き教授、留学生の数の増加、有能なる職員、図書の実、豪壮なる学舎等々は総て諸君の完成の為のもの以外

の何物でもない。私は学生諸君の睿智と良識こそは、必ずや関大発展の為の一大基盤となることを信じて疑わないのである。

創立七十周年と云う年は、過去の業績をたゞえ祝う年であると共に、発展途上の関大をより大ならしむる為のスタートとすべき年でもある。学生諸君よ、偷安の夢を貪ることなかれ。

我が関西大学発展は諸君の双肩にかゝつてゐることを自覚せよ。大学の生命は永遠である。諸君の手によつて我が関大発展を推進せよ。

最後に私はこの光輝ある七十周年の年頭にあたり、我が関西大学につながる総ての人々の、心からの貴い平和な御協力を願つてやまないものである。

他に見られる様な不必要なる、まさつや、学内外に於ける派閥行動等の絶無なることを祈つてやまないものである。

責任者諸公の遠大なる理想が着々として実現され、日と共に、年と共に、発展の一路を辿りつゝある現況を見て、常務役員の末席をけがしてゐる私の心は感謝と感激でふくらんでゐるのである。

我が関西大学を守る人々の多幸なことを祈りつゝ擲筆する。
(常務監事)

創立時代の回顧

わが関西大学は、その前身である「関西法律学校」として誕生してから、今年の晩秋には、「古稀の寿」にも似た七十周年の祝典を迎えることになる。

明治十九年十一月四日に、大阪西区京町堀の願宗寺という一寺院の本堂を借りつつ、六人の講師と四人の事務員とで開設された「関西法律学校」の生徒募集では、創立者達の予想をはるかに裏切つて、入学受験者三百名が殺到し、無試験入学者八十名を加えた最初の入学許可者が二百三十名の多数に達したので、止むなく一ヶ月後の十二月十三日には、こ

創立七十周年の新年を迎えて

岩 崎 卯 一

の薄暗い寺院校舎を捨てて、東区淡路町の一建物に移つたと、関大創立史のページ（『関西大学創立五十年史』昭和十一年五月一日刊、六一―一頁参照）は、当時の模様を、克明に物語っている。そのとき少壮気鋭の司法官達であつた堀田正忠、小倉久、井上操、手塚太郎、鶴見守義、志万鍛の諸講師をはじめ、これらの

人人の直属長官であり、自分もまた名譽校員として責任を分担した児島惟謙（當時は大阪控訴院長）、大島貞敏（當時は大阪始審裁判所長）の両氏も、いまだはことごとく地上の人ではない。だが、当時の学生であつて、現在もおみずから

の臉のうちに開設時における母校の情景を偲び得る幸福な第一回卒業生（明治二十二年九月十六日卒業式）が、七十周年祭を挙行しようとする昭和三十年の今日においても、なお二人まで健在である。

その一人は、明治の末年にドイツへ留学した民法学者であり、本学から第一号の法学博士の学位記を獲得（昭和三年一月）しただけでなく、理事または監事として久しく本学の経営に貢献した辯護士界の長老武田宜英博士（在学当時は上野良吾、その後改姓名）であり、その二は、海軍法務局長の要職を経たのち貴族院議員に勅選され、わが国上院の法制通

として令名のあつた内田重成氏（在学当時は津島重成、その後改姓）である。湯ヶ原の温泉境に閑居される武田博士と下関郊外に幽棲される内田氏との健在と喜悅とを想うとき、いま第十三代の学長を勤めてはいるが、遙かなる後輩の一人たるわたくしも、ひとりてに心温まる心地がする。

過去における上げ潮時代

創立このかた終戦時までの関大史をかえりみると、「上げ潮」と形容し得られる時期を、二度迎えている。

第一は、いわゆる「福島時代」の最盛期ともみられる明治四十年前後である。

すなわち専門学校令に依る学制の飛躍的な整備（明治三十七年一月と同三十八年一月）、「私立関西大学」という新しい名称の採用（明治三十八年一月）、従つて従来の校長制から学長制への転換（同年）、福島学舎の竣工（明治三十九年十二月）などで、わが学園も辛うじて東都の名ある各私立大学と列を同じくすることができたのである。この間に送迎した三代の学長、加太邦憲、河村善益、古荘一雄の三氏は、それぞれ現職の大阪控訴院長であつたが、実際上の教務全体を司宰していたのは教頭の高根義人博士と、その後任者であつた織田万博士とであり、経営の重責を担つていたのは、役員

山岡順太郎氏の関大総理事就任（大正十一年五月）であつた。山岡氏は、友人たる柿崎専務理事に口説かれて関大への関心を抱きはじめ、先ず関大拡張後援会を組織して会長と成り（大正十年九月）、総理事就任と同時に自己の側近者であつた池尾芳蔵、佐竹三吾、宮島綱男の三氏を理事陣に加え、織田学長辞任に伴い学長職をも兼ね（大正十二年一月）、柿崎、宮島の両専務理事に補佐されて、大学の面目を一新した。この間に、大学昇格の目的も達成され（大正十一年六月）、千里山学舎の輪廓もようやく整つた。

飛躍の継続裡にある現在

昭和に入つてからの二十一年間にわたる沈滞期は、仁保亀松博士、神戸正雄博士のような碩学を専任学長に擁していたながらも、関大学園の歴史に、特に記述するに足るような躍進の蹟を残していない。

それどころか、第二次大戦の末期には、関大史の終焉さえも想わせたほどの衰微を示した。しかるに、祖国日本は敗戦の耻辱に泣いたにもかかわらず、わが国の私立大学一般、とりわけ、われらの関大学園は、人もわれも共に驚くほどの復興と発展とを、戦後の十年間に成就した。わたくしのごときも、この間に重い任務の一端を担つて来たが、かような興隆は、わが学園が、天の時と地の利と人の和とに恵まれたからにはほかならない、しかも、この躍進過程は、依然としてなお續いているだけでなく、創立七十周年の祝典を前にした昭和三十年にも、その頂点に達して足踏みするであらうとは思われない。

（学長、法学博士）

創立七十周年の新年を迎えて

久井忠雄

母校関西大学創立七十周年、昭和三十年の新春を迎えるにあたり、七十年の伝統を築き上げ今日の大を成し来つた先輩各位の功績を思い、今更のようにその偉大なる足跡を嘆仰すると共に、これを受継ぐ自己の責任の重大さを深く痛感するのであります。

かえりみまするに、新理事会が発足しましてよりかぞえて四年、これを予算的に考えてみますると、次表の通りであります。

一、各年度予算額

年度別	総予算額	
	経常費	臨時費
昭和廿七年	三、〇〇〇万円	二、〇〇〇万円
昭和廿八年	三、〇〇〇万円	二、〇〇〇万円
昭和廿九年	三、〇〇〇万円	二、〇〇〇万円

二、各年度予算増加額

年度別	総予算額	
	経常費	臨時費
昭和廿七年	一、〇〇〇万円	一、〇〇〇万円
昭和廿八年	一、〇〇〇万円	一、〇〇〇万円
昭和廿九年	一、〇〇〇万円	一、〇〇〇万円

以上のように、昭和二十九年度は二十七年に比し、実に総予算三億一千万円の増加、経常費は一億二百万円の増加、臨時費は二億八百万円の増加となるのであります。

先ず経常費の増加の原因を考えますと、国内（毎年五名）国外（毎年三名、昭和三十年までの統計十二名）留学制度、図書費の増額、学会の開催増額、学会出張補助、研究費補助、有給副手制度、二回のベイス・アップ、四月・十月の定期昇給制度、年四ヶ月の賞与制度、団体生命保険加入、交通費補助増額、勤続手当制度、家族給増額、特別俸給制度、特別昇給制度、出張旅費増額、講師給増額、時間外勤務手当増額、退職金増額、宿直手当増額、住宅関係費貸与制度、役職手当増額、教授その他事務職員増員、研究会・懇談会費の増加、評議員関係及び校友会活動費増額、物件費の増加等がその原因であります。

次に臨時費の増加の原因を考えますと、学生数に應ずる適切な物的施設の整備、旧学舎の老朽による建替、二部学生を收容する為の天六学舎の増改築、研究室の整備、学生寮の新設、一高校舎の移築等がその原因であります。

そもそも、大学とは真理探究の場であり、これを計数的に処理する教育事業は、真理探究事業と言うべきでありまして、すべての施策はこの点より発しこの点に帰結しなければならぬのであります。而して、大

学に於ける真理の象徴は教授であり、即ち教授陣容の強化こそ、教育事業の第一義でありまして、吾が大学の総力をこの点に結集し、いかなる障害をも乗り越えてこれが強化に努力し、世界的規模に於ける文化を結実せしめ、祖国の運命を直視し、これを打開する学生を社会に送り出すことを私の任務と確信しているのであります。

昭和三十年度の予算もこの線に於て企画実施したいと思ふ次第であります。即ち教授陣容の強化・教育施設の拡充をその骨子とするものであります。

教授陣容強化の第一は、優秀教授の招聘でありまして、現在本学は教授一三〇名、講師一九〇名、計三二〇名であります。本年度は更にこれが増員（専任約三〇名、講師約三〇名）の予算的措置を執ると共に、その具体化に努力したいと思ふのであります。しかし、戦後各地に多数の新制大学が設置されるに伴い、この問題の解決は甚だ困難であり、理事会は勿論、学長はじめ教授の方々も非常に苦心を払われているのであります。

従つて、第二に考えられることは、各部門の研究をより一層深く、より高くするため、現任教授の国内国外留学問題であります。目下の処、国外留学は堀、矢口、森川、中谷、広瀬、（以上留学済）、高木（ロンドン留学中）、上道、安田、桜田（本年四月出発予定）の諸教授、昭和三十年度は川上、松原阿教授及び藤本助教授であり、国内留学は佐伯、植田、錦方、吉永、中川の諸教授でありまして、昭和三十年度も五名を予定し、只今学長に於て詮衡中であります。この制度は毎年、人員を増加し、なるべく短期間に全教授に留学していただきたいと存じているのであります。

第三は、本学卒業生中より優秀なる学生を母校教授として育成するため有給副手制度を設け、大学院授業料を免除すると共に、研究費を補助して勉学の機会便宜を提供することを、昭和二十九年より実施しているものであります。本年度も引き続きこの制度を強化したいと存じております。

第四は図書充実にありますが、二十七年五百万円、二十八年七百万円、二十九年一千二百万円、本年度は更にこれを増額し、この増額は教授の研究室備付図書費として処理したいと考えております。

第五は研究室の整備の問題であります。二十七年に於ては十三であつた個室を現在は六十七に増し、一応不満足ながら全教授が研究室を有する状態になっておりますが、なおこれは、近き將來大学院の移築を含め、研究室の完備をはかりたいと考えているのであります。その他学会の開催斡旋、学会出張の補助、研究費補助等二十八年より実施しておりますが、これらにつきましても更に積極的な力を盡したい所存であります。

次に、教育施設の拡充であります。二十八年以降、威徳館跡の新築、天六西側の増築及び天六西側山銀ガラスKKの土地買収、一高移築、西研究室の買収並びに改築、尚志館・学生食堂の新改築、学生寮買収新築、その他学内建物（馬術部厩舎・弓道場を含む）の新設等を完成し、一高講堂、理科教室の新設及び法学部本館跡新築に着手したのでありますが、本年はこれを継続し、その他経商学会・天六学会の増築及び暖房装置、千里山造園計画、学生寮の増築、記念館新築、第二運動場の新設等を、緩急の情勢並びに本年度の経済状況と考へあわせて企画実施したいと思つております。

以上、教授陣容の強化と教育施設の拡充に就いて述べてまいりましたが、教育事業本来の使命であり大学の真価を決定づける教授陣容の強化のみに専念することができず、教育施設の拡充をも同時に解決しなければならぬに非常な困難と矛盾があるのであります。加うるに、千里山・天六の両学会を同時に整備し、一つの設備を昼夜二回転できないと言ふ、宿命的なる経営の苦悩があるのでありますが、これを打破してこそ、吾が関西大学の飛躍的發展が招来され先人の苦心にも応えうると信ずるのであります。

以上の二点について重要な問題としましては、第一に職員の待遇であります。先に申しましたように二十八・九両年度に於て根本的な改正を実施してまいりましたが、現状で完全というのではなく、以上の施策の完成と考えあわせて更に思い切つた措置（年金制度の実施を含む）を執りたい所存であります。

もし、経済情勢が悪化して大学経営に危機の到来するようなことがあつた際は、臨時費的なものはすべて打ち切り、物件費を節約し、教授並びに常縁の下の力持的努力をし、教授と車の両輪の如き関係にある事務職員をして生活に後顧の憂いのないよう最後まで努力したいと思つております。これは人的要素を根拠とする大学であればこそ措置と信じます。

学生関係に就きましては、大学祭・文化祭の補助等恒例的なものの他に、部活動の積極的援助、授業料納入方法の緩和、授業料の現状維持、学費貸与制度の強化、学生寮の増築等を考慮しておりますが、更に、将来学生会館の建築は必至の問題として解決したいと思つております。なお本年度より、社会の要望する有為なる人材を育成し、大学の社会的使命をも達成する見地より、全国教育委員会からの推薦をうける「特

別奨学生制度」及び学生の質的水準を高めるために、各高等学校長より推薦された成績人物共に勝れた者を優先的に入学を許可する「推薦入学制度」を新設し、今後も益々これを発展させたいと考えております。

次に評議員関係に就きましては、二十八年以降各種委員会を設け、評議員各位の積極的な御活動があり、特に昨年夏、各委員長は酷暑の際、東京六大学を熱心に視察されて有益なる報告書を作成される等、従来かつてみることの出来なかつた活動をされたのであります。もとより評議員会は唯一最高の議決機関でありますので、この機関が有効適切に活動するの否とは大学の運命を決する鍵であり、独断の横行をいまいしめ、すべての問題を民主的に解決する基盤であります。かかるが故に、予算的にも多額の費用を計上して、この機関の運営に遺憾のない措置を講じてきたのであります。本年度は更にこの点について積極的な企画を実施したいと存じております。

次に校友関係に就いてありますが、今日の如く全校友が母校の運命を衷心より憂ひ、全国にわたり活潑な活動が展開されつつある状況を見ます時、誠に心強いものを覚えるのであります。これはつねに自らを空しくして、各地に於て支部結成に、更にそれが進展の為に御努力下さる校友の方々の御盡力によるものと深く感謝する次第であります。私といたしましても校友との連繫に全力を傾注することこそ、吾が大学発展の一つの大きな推進力になると信じておりますので、予算的にも適切な措置を講じておきたいと考えております。

尚多年の懸案である校友会館の問題であります、

現在七百万円、本年約二百万円を追加積立したいと考えております。この問題は本年中に何らかの形に於て具体化したいと、直接関係者が並々ならぬ御努力を一つけておられるのでありますが、金額的にいわゆる「帯に短し、褌に長し」という悩みがあるのであります。更に根本的には、これが維持費をいかに集めるかに問題の重点がかつておりますので校友各位の積極的な協力をうるよう措置したいと思うのであります。

次に寄附金に就いては、現在約三千七百万円強の実績をあげているのでありまして、卒先この挙に参じて多額の出費をしていたときました方々に対して深く感謝するところであります。これは母校の飛躍的發展のために、現在借款を重ね、将来その数字が尨大になることを予想している現状に照し、今後とも積極的な努力を傾けたいと思うのであります。

更に附加して一高・一中の問題に就いてであります。これは経理的に多大の困難を伴っているものであります。ただ綜合学園の立場からのみ考えて処理してまいつたのでありますが、従来の運営方式では財政的にも内容的にも充実しない結果をみることはあきらかでありますので、本年度は経理面に捉われず内容の充実に努めたいと思ひ、現任教員の研究費並びに研究出張の補助、優秀教員の招聘等を企画実施したいと存じております。即ち、この内容充実によつて、綜合学園としての教育の確立を図り、一高・一中卒業者を無条件に大学へ進学させる意図を実現したいと思うのであります。この為には入学許可者の数の減少も止むを得ないと思存するのであります。

次で本年は、母校創立七十周年記念式典を舉行するのであります。七十周年史編集、記念論文集刊行及

び各種行事の準備をすすめつつあり、かつ、これが企画実施にはひろく学生並びに校友の協力をえたいと思存するのであります。これが経費として約一千万円計上したいと考えております。

以上は経理面からみた本年度の運営の私案であり、学長・校長の統括する教務面の財的裏打でもあります。思ひまするに、砂であるといわれた中華民國が、中華民国政治協議会發足以来五ヶ年にして全世界の驚嘆する再建を完成し、アメリカをして畏敬に値する復興を遂げたといわしめたドイツ、戦勝国にしてなおかつ、最近まで耐乏生活を継続し、世界の覇者たる地位を保持する英國等の実例をみる時、私は、精神年令十二才なりとの侮蔑を甘受せざるをえない日本の現状を憂うのでありまして、最近至るところに祖国再建の叫びをきき、民族の運命を直視し、これを打開せんとする気運の勃興をみることは、けだし当然といふべきであります。

敗戦によつて、何かが抜けているという日本、その何かは、即ち祖国に対する愛情であり、母校に対する愛情であり、家に対する愛情であり、自己に対する愛情であり、言葉を変えれば自己を見失つたということでありましょう。新理事会發足以来、既にかぞえて四年、母校の現状には未だ何かが抜けているという状況を脱却したとは言えないものがあるのであります。

ここに創立七十周年の新年を迎え、私は、深恩一番母校愛を更に振起し、祖国の完全独立に母校の運命を賭け、自己の任務に邁進したいと念願するのであります。

(専務理事)

海外の大学より

アメリカ国会圖書館より圖書寄贈

本學と學術圖書及び各種定期刊行物の交換を行つてゐるアメリカ国会圖書館より、このほど左の圖書が寄贈された。

Browning, Robert: Selected poetry.

Highest, Gilbert: A clerk of Oxenford.

Merrien, Jean: Lonely voyagers.

Modern Education and human values.

カルフォルニア大学寄贈圖書

本學と圖書の交換を行つてゐるカルフォルニア大学からこの程左記の圖書が寄贈された。

MODERN PHILOLOGY:

Philip M. Palmer: German Works on America 1492-1800.

Siegrfried B. Paknat: Religious Forms and Faith in the Volksbuch.

Elisabeth Sebastian Brant, Ovid, and Classical Allusions in the "Narrenschiet"

Hans M. Wolff: Heinrich von Kleiss, "Findling"

Lawrence M. Price: English Literature in Germany.

E. H. Templin: Money in the Plays of Lope de Vega.

Michele de Filips: The Literary Riddle in Italy in the Seventeenth Century, 1953.

STATISTICS:

Lucien Lecam: On some Asymptotic Properties of Maximum Likelihood Estimates and Related Bayes' Estimates.

Paul Levy: Random Functions: General Theory with special reference to Laplacian Random Functions.

Dorothy C. Clarke: A Chronological Sketch of Castilian Verification together with a List of its Metric Terms.

(出版部)

學内報

評議員会互禮会

評議員会互礼会は、年始交礼の爲、一月二十九日午後三時より天六学舎において開催。

出席者左の通り(敬称略・イロハ順)

岩崎 卯一 岩本 公夫 井戸崎好次
今西庄次郎 池田信之助 西尾専太郎
西本 寛一 戸根 泰雄 織田佐代治
大石雄一郎 大小島真二 和田 豊二
桂 忠雄 神屋敷民藏 四辻 詮
竹沢喜代治 中谷 敬壽 中務 平吉
中村 正雄 長柄 金吾 村尾 静明
矢野 文雄 保井 剛一 山崎 敬義
松原 藤由 政井 武 福田 繁芳
近藤 政士 江里口春志 沢村 栄治
水谷 揆一 三島 律夫 白川 朋吉
下条小野右衛門 平井三朗 久井忠雄
角田好太郎

千里山學舎新築工事地鎮祭

昨年九月新築された法文学舎に接続する学舎の新築工事地鎮祭は、十二月二十三日(木)午前十時より、吹田垂水神社神官により厳かに舉行された。なお式には理事長はじめ各理事、評議員会議長、



地鎮祭

同副議長、各学部長、教授、職員が列席した。

昭和三十年度學外研究員決まる

学外研究員としては現在、高木秀玄教授(経済学部)が滞英中であるが、昭和三十年度学外研究員として左の諸教授が選ばれ、昭和二十九年十二月二日付を以て決定された。

在外視察研究員 法学部 教授 川上 敬逸
在外学術研究員 経済学部 教授 松原 藤由
同 助教授 藤本 是

廣瀬教授歸學

在外学術研究員として昨年五月渡欧し

た文学部廣瀬三教授は、近東、ギリシヤ、イタリアに古代文化をたづね、またフランス、イギリス、アメリカ等を訪れて、昨年十二月五日羽田空港着、同十日大阪駅着で無事帰朝した。

新年交禮会

一月六日(木)午前十時半より、理事長、学長はじめ大学関係者の新年交礼会が恒例の通り行われた。



新年交礼会

圖書館學講習所終了式

本学の図書館學講習所第五回講習が終了したので、昨年十二月二十一日(火)午前十時より学長はじめ関係者列席の上終了式が行われた。

學会出張

◇法学部岩崎卯一教授、上林良一助手は十月十六、七両日早稻田大学における日本社会学会に出席。

◇法学部木村健助、明石三郎、池垣定太郎各教授は十月二十九、三十両日同志社大学に於ける日本比較法学会に出席。尙同学会にて木村教授は研究報告「フランス民法典百五十年史」特に民法典と判例」

◇法学部渡辺宗太郎、桜田譽岡教授は十月三十一、十一月一両日神戸大学における日本公法学会に出席。

◇法学部本浪章市助手は十月三十一日大阪市立大学の日本国際私法学会に出席。

◇法学部植田重正教授、中義勝助教授は十一月一、二両日大阪大学における日本刑法学会に出席。

◇法学部木村健助、明石三郎、池垣定太郎各教授、岩本助教授は十一月一、二両日関西学院大学の日本私法学会に出席。

◇法学部石尾芳久助教授は十一月三、四両日大阪大学の日本法制史学会に出席。

◇法学部川上敬逸教授、本浪章市助手は十一月二、三両日立命館大学における日本国際法学会に出席。

◇経済学部中川庸太郎教授は十一月二日大阪で開催された金融学会秋季大会出席十一月四日神戸で開催された第十回国際経済学会に出席。

最近ケンブリッジ大学のギルボード教授 (C. W. Guillebaud) から、ユネスコの委嘱によって公にされた一書 (The University Teaching of Social Sciences : Economics) の寄贈をうけた。この書には、英、北米、仏、スエーデン、ユーゴスラヴィヤ、エジプト、メキシコ、印度、イタリー、西独及びベルギー等、十一ヶ国の大学に於ける独立科目としての経済学の沿革、地位、範囲、構成、他学科との関係、教授の養成及び任用、修得者と社会との関係等が詳細明確に述べられている。

各国の大学に於ける

教科目としての経済学

る。経済学を教える人々、又これを学ぶ人々に是非一読を勧める。なお、この書に關しての一層精細な紹介は、丸善発行の「学鑑」近刊号を参照されたい。

ギルボード教授は、経済学の泰斗、アルフレッド・マーシャルの甥にあたる。実は筆者には未見の友である。マーシャル夫妻とは至つて懇意であり、夫君の没後も未亡人と交游を続けていたが、第二次大戦の為、通信は一時中断のやむなきに至つていた。終戦後、

外国通信の禁が解かれて直ちにその安否を問いあわせたところ、ギルボード教授から返信があり、「叔母はマーシャル記念図書館の管理者として、最後まで毎日郊外から自転車通で通館していたほど達者であつたが、一九四四年九十才の高令を以て遂に他界した」。これが機縁となつて、その後ギルボード家との交游が始つたのである。一昨年末、本学からケンブリッジ大学を訪ねられた、堀、森川、広瀬の三教授も同家を訪れ、同大学見学の案内、大学食堂に於ける会食等、大いに歓待を受け特に交驩につとめたのであつた。最近寄せられたギルボード

教授の書翰中に「戦争のために日英関係は、遺憾ながら一時悪化したのは事実である。しかし近年我がケンブリッジを訪う貴国の教授や学生が漸次増加し、これら生徒に親しく接し学問その他につき、互に意見を交換し得るは、たしかに両国関係の改善に寄与するところ少なからざるを思い、深く同慶に堪えない」と特筆されてあつた。国民外交の一端として我が方に於ても真に心すべき点である。なお、ギルボード教授はセント・ジョーンズ・コレッジに属し、ケンブリッジ大学経済学教授会の議長であり、同時に又英政府が設置する各種委員会の委員である。

更に最近筆者がギルボード教授から受けた好意、殊に経済学徒にとつて最も興味ある貴重な文献を手にしたことは、感謝、欣快に堪えないところである。

即ち一昨年一月、スコットランドの一邑、アダム・スミスの生地カールデイに於て、彼が一七六七年から一七七六年まですまい、又不朽の名著「富国論」を完成した家屋の入口に記念ブラックが掲げられ、その除幕式に当りエディンバラ大学教授グレイ卿 (Sir Alexander Gray) が一場の講演を行った。因に一九一九年、すでに同所に一ブラックが掲げられてあつたのであるが、その後アダム・スミスの研究家によつて種々誤りのあつたことが発見され、次のような碑文を刻んだ新しいブラックが掲げられたのである。

ADAM SMITH 1723-1790 born in Kirkcaldy. On this site stood the home of his mother in which he lived from 1767-1776 and completed "The Wealth of Nations".

His grave is in the Canongate Churchyard, Edinburgh.

Erected 1953.



夙にアダム・スミスの研究に携つた筆者としては、このグレイ卿の講演に異常な期待と関心とをよせていた。然るにグレイ卿の著書を読んだことはあるが、直接交游を持たない筆者は、これを得ようとギルボード教授の好意に訴えた。同教授から間もなく返書があり、希望に副うよう努力するとあつた。待つこと三ヶ月、昨年末前記講演のテキストに、記念ブラック並びに除幕式の写真まで添えて送られた。筆者の喜びは筆紙に尽し難く、その故に近來にない明朗な気持で一九五五年の新春を迎えることが出来た。遠方に朋有亦樂しからずやである。ここにグレイ卿とギルボード教授とに対して深甚の謝意を表す。

なお、グレイ卿の講演の内容に關しては、いづれ稿を改めて紹介する機会を持つてあらう。(T・M生)

(写真左はギルボード教授夫妻)

大阪周辺の庄屋留書

春原 源太郎

徳川時代の大阪人は経済的実力のみならず、意識的にも判然と江戸に対立し、名月や江戸の奴らが何見てるなどと溜飲を上げていたのも大阪町人である。

この意味で大阪を中心とした近世法は幕府法に支配され江戸と共通しながら、大阪の特色とする仕来法をもっており、大阪を中心とした取引は各地に影響をもつていたから、地方藩法の下に形成された一地方法とは異つた重要さをもつてゐる。近世法を説明するに當つて、或は従来説明された江戸を中心とした江戸町人法と比較して、大阪を中心とした庶民法が大阪町人と周辺農民との関係を考慮に入れながら、実証資料によつて明かにされなければならないことが多い。

こゝでは農民資料といつても主として大学図書館に集められている所謂「庄屋文書」について紹介するもので、その内容を見ると近世法は勿論社会経済史料となるものが多い。近世庶民法はこれらの背景に支配されながら行われていたものであるから、その背景の資料を無視することはできない。また近世農民法と言つても一応分類されるのは団体法としての

農村法と私法としての庶民法で、これも近世法の特色として団体法と個人法とを全く分離して観察することは困難であり研究の角度は自ら異らざるを得ない。

資料として所謂庄屋文書の残存するのは少く、総合的に調査することは困難であるが、大学図書館には広く大阪といわれる攝、河、泉三国のもので、元祿享保頃から明治初年の堺県、河内県などに至るものが集められているので便宜である。今日資料の不足にはいろいろの理由が挙げられ、戦災によつて蔵のまゝ焼失したものは致方ないとし、また一部好物家の手に納められたものはまだしも、市町村史など編纂のために集められた史料も、その編集が終り人が変わると所在不明となるものも多く、特に町村合併などのために記念出版などの後の資料保存は容易でないらしく、或はまた庄屋、大庄屋の蔵に納められていたものも、その家の衰頹と繁栄に伴つて散逸するのは例である。衰頹のために散逸するのは通常としても、その子孫が職業、住居を変更したために廃棄されたなども多く、廃棄のための苦心談のみが残されている。

一方近世資料であるために地方によつ

ては文書中に記された関係者の子孫が現存するため、たとえ研究のためとは言いが、稀にはその儘公表することを躊躇しなければならぬものもあり、別冊宗門人別帳、五人組帳、奉公人改帳など特殊な研究にのみ利用し得るに留るものもある。

現存する庄屋文書中には宗門人別帳、五人組帳の如く、毎年三月定期に書改められたものゝ類が最も多く、日々の諸願書留の類が庄屋記録として綴られている例も多い。これら資料のうち五人組帳前書は「五人組法規」として既に多くの研究が行われているが、従来東京の学者が資料を集めたためか、公表されたものゝうちには大阪周辺のものが殆ど取上げられていない。殊に従来問題にされていたのは法規の形となつたもので、五人組帳、宗門人別帳の類は形式化し、或は習字本として流布したものゝ前書(又は後書)の規定よりも、内容の各人に關する事項記載に庶民法の実証資料としては重要な問題を含んでいる。ことに余り関心がもたれていなかったようである。

大阪周辺と言つても和泉、河内、攝津と国を異にし年代を異にすると、宗門人別帳、五人組帳それぞれ記載形式まで異なるが、河州松原村明治四年の宗門人別帳の如きは宗門改帳としては最後のものであり、内容の事項記載には貼紙によつて初めて姓を附し壬申戸籍(明治五・こゝ

では「人員帳」といつてゐる)と称せられ、最初に戸籍に書改められる基本になつた貴重なものである。

これらまとまつたものゝ外に多いのは絵図面で、その他多くの附属文書が雑然とあるが、その雑然のなかに従来明かにされなかつた資料があるように思ふ。

庄屋留書中には助郷人足(宿助合)、御貸下げ拝借金、借財御仕法、改鑄錢通用年貢米金納、新田開墾、鳴物停止などから植付、風水害、地震、米商、質、威鉄砲、小作、人別送り、往来一札、出生、死亡、婚姻、相続、改名等に至るまで、公私法にわたる生活が詳細に記録されている。小西来山は、

御奉行の名をおぼへず年の暮などと呑気なことを言つて罰せられたと云われているが、留書類に見られる農民生活は殆ど庄屋、代官、奉行につながつてゐる。

攝州嶋下郡(現在三島郡辺)味舌、耳原等七ヶ村文書中には「相続講」「尿取締申合」などがある。

頼母子講の流行は富くじ類似のものにまで發達し、明治に至つてからも相続講と仕方法(死法講などゝ惡口された)の區別がつかず、頼母子講の全面的禁止にまで行過ぎる変遷を辿つた。特に文書中に代官を中心とした「調達御講」の存在したことが、それが農民にどんな負担をかけたか、それが「掛ヶ銀調達難仕」拝借願出

のことだけでなく、武家頼母子としてもつと資料の欲しい問題である。

村の行事は稽古角力も早魃のための雨乞も一々願出と御開済の手続をとつて行われているが、雨乞の願書も順を追つて調べてゆくと「照統難澁」は「不作御見分」となり、次で「最早飯米等無御座一拜借米御願」とまでなつて農民の窮状が訴えられている。

耕作のために大阪周辺の農民が魚肥、絞粕などを用いたことは肥売掛代金訴訟などの例に見られるが、大阪市中の尿尿が攝河百三十四ヶ村百姓に優先汲取権があつた程重要な肥料であり、汲取に關して江戸と大阪は慣習が異り、大阪町人と周辺農民との間には汲取権や価格について多くの問題を起しているが、需要者側の各農村でも「上乘、即日掃船」などによる取締申合や不正防止が行われていたことなど興味あることであろう。

これら社会経済史料の方はいづれ専門によつて紹介される機会があると思うので、庄屋留書の中から庶民法資料の二、三を拾つてみると「乍恐御訴訟」とする民事訴訟の記録と意外に多いのは「家出行衛不明」とする欠落（失踪）である。

訴状も奉行宛のものとは大庄屋宛のものがあるから奉行所の分は「乍恐御訴訟」であり大庄屋の方は「乍恐訴訟」である。奉行所訴訟は「広大の御慈悲」「御威光」によるものである。

大阪の金銭出入に關する六十日の日切制、先訴後訴の優劣などの特色についてはこゝに詳しく説明できないが、大阪の慣習法、仕来、大阪定法が随所に見られる。また出訴届から出訴までの手続即ち訴訟当事者の側から見た體驗法としての民事裁判手続として、奉行所へ訴えるまでの間に村役人を通じて行われる「引合」と、出訴後も対決から日切までの間に行われる「下済」の重要なことが「下方に而対談」によつて行われている。暖（扱）済口、願下げによる通常の訴訟手続と身代限り前には強制執行のなかつた江戸時代法では裁判というのは結局支払うべき旨の「御利解被仰付」で相手方が不履行のときは「追訴御願」として履行を求めている。特にこれらのことは奉行裁判でなく大庄屋裁判について見られるが、奉行裁判でも奉行所に於て何日迄に「対談小様被仰付」が普通の形態である。

奉行所裁判では申渡不履行の者に對しては押込、手鎖を行つた江戸時代法の実例として「三日押込被仰付」などもあり、まとめてみるとかなり多くの法律論が見られる。

奉行所でも法規、先例による準則に従つたもので、所謂大岡勘きの如きことが行われていたものではないから、手続の不備や不明な用語については進んで取調を行つてゐる。実例中に「過米と御座候儀者——村方小前百姓共より年貢米取立

領主役場へ右御年貢米納済相成候次に相殘候分を過米と相唱来右を外方へ売掛代金に而小前共へ相渡遣候仕来」と説明して今日でいう準備書面を提出している。この事件で隣村や米商に米を積送ることを「津出し」と云つてゐるが、一般に米を送ることに用いられたようである。

徳川末期に及ぶに従つて欠落届の多いことは、各地の庄屋文書、宗門人別帳を調べる際意外に思うことであるが、大阪周辺の分にも「娘二十四才」など女家の出届出がしばしば見られることは自由結婚の法律的取扱かとも思われる。

婚姻、養子縁組には一々「願上」「開済」の手続を要したことは、江戸町人法を以て説明し得ないところで、嶋下郡味舌村の宗門帳表紙裏にその書式が記載されている。これらのことは近世農民法の実証的研究によつて江戸町人法と對比して漸く関心がもたれることになつたようである。従来地方藩法の下に行われていたこれらの手続が、大阪周辺の農民身分法としても行われていたか否か明かにされていないが、これらの実証資料によつて明かにすることができようである。ただし「不縁に付罷帶り」等の記載には願上等の手続がとられていない。離婚、離縁は願上をするまでもなく致方のないものとしていたようである。

珍しい事件では生活困窮のため従弟に對し「合力御願」と扶養請求事件があり

「合力銀」を出して済口となつてゐる。

また耳原村文書中に「家出闕所」に「新兵衛家屋舖附立帳」があり、悍、娘などの家出行衛不知と異り、名前（戸主）であるから田畑、家屋敷家財等一切の財産が書上げられ五人組、親族立会の上年寄、庄屋奥印をして代官所へ届出た控で神棚、徳利から石臼、つるべに至るまで九十六点となつてゐる。大阪町人の欠所に種々不正の行われたことは大阪市史にも見られるところであるが、農民欠所の実例は珍しい。

大阪町人といつて幅をきかせてゐる者も、西鶴などのいうようにもとを正せば百姓の次男以下で奉公に出て産をなしたと言われ、和泉、河内の人別帳にはしばしば大阪奉公の例が見られるが、攝州耳原村には「奉公之儀ニ付他村へ御人別之者差出候儀不相成」となつてゐたにも拘らず奉公に出ている者は「心得違仕他參奉公」ということで全部引戻されることになつてゐる。ただしこれらが實際どの程度守られたかは疑問である。

これらの資料を詳細に調査すると更にいろいろの研究ができると思うので、宗門人別帳、五人組帳、検地関係のものなど一定の形式に従つた大部のものよりも庄屋留書類の如きものは、図書館や研究所におかれるだけでなく、資料として出版されることが近世法或は社会経済史研究のため望まれる。（理事）

学生



るが、その中であつて、ヨット部の全国制覇、アイスホッケーの関西リーグでの優勝、ラグビー部の全国大学ラグビー大会での初優勝等、新らしく擡頭して来た部の今後の活躍は大いに明るい希望を抱かせるが、伝統ある体育会各部の強化、奮起が要望されている。

ラグビー部

第五回全国大学ラグビー近畿予選最終日、本学は甲南大学を破り出場権を得たが、新春早々行われた同大会に於いて初の栄冠を獲得、長い雌伏の後とて同部の第一の飛躍となること期待される。

12月5日 近畿予選

本学 19 (8110) 3 甲南大 於西宮

1月2日 オニ

全国大学ラグビー大会

本学 31 (12010) 0 長崎大

(近畿) 6 (0100) 0 日体大

一月四日 本学 32 (26100) 0 松山商大

オニ 2日 (近畿) 6 (0100) 0 於瑞穂

一月六日 本学 32 (26100) 0 中・四国 於瑞穂

オニ 3日 (近畿) 6 (0100) 0 於瑞穂

ホッケー部

十二月十九日第一回関西ホッケー選手権が行われたが、決勝で本学はKRACと引分けとなつた。

準決勝 関大 5 (3210) 1 神戸大 於神戸東
決勝 関大 3 (0311) 3 KRAC 於同右

アイスホッケー部

シーズンに入つた同部は第四回関西三大学アイスホッケーリーグに、十一月二十二日同大を破り初優勝を成し遂げたが、続いて関西学生リーグにも十二月四日最終戦に同大と引分けたが、三勝一敗一分の戦績で優勝、何れも初優勝の栄冠を獲得したが、今冬、同部の活躍が大いに注目されている。両試合最終日のスコア及び戦績は次の通りである。

十一月二十二日

関西三大学アイスホッケー

本学 6 (3100) 0 同大 於アサヒ

戦績Ⅱ(1)本学 2勝 (2)同大 1勝 1敗

(3)関学 2敗であつた。

十二月四日

本学 2 (0110) 2 同大 (引分)

戦績Ⅱ(1)本学 3勝 1分 (2)関学 3勝 1敗

(3)同大 2勝 1敗 1分 (4)立命 1勝 3敗

(5)浪大 4敗

陸上部

シーズン最後を飾る第十六回関西学生駅伝競争が十二月十二日神戸駅前、京都平安神宮の八六・四四八五キロ(九区間)のコースで十三校の間に栄冠が競われたが本学は選手故障等のため、ベストメンバーでレースに臨むことが出来ず遂に宿願を達することなく、第二位に甘んじたが、今後の精進が期待される。当日記録は次の通り、

1位、立命 4時間48分35秒、2位、本学 4時間55分5秒(高久、吉田、山本、日雨孫、白神、高橋、鹿川、渡辺、土谷) 3位、近大 4時間56分30秒、

スキー部

ウインター・スポーツの華であるスキー部は関西学生選手権、全日本学生選手権団体に備へて部の全力を挙げて左の通り合宿練習及び試合を行う予定である。

十二月十六日一月二日 青森県緑温泉、強化合宿練習、参加人員21名

一月十七日 大崎温泉、オニ二十八回全日、及び準備練習、参加人員23名

其の間

一月二十二日十六日(6日間) オニ二十八回全日本学生スキー選手権大会

一月十八日二十四日、長野県野沢温泉

参加人員未定

其の間

一月十八日二十三日 オニ二十五回全関西学生スキー選手権大会

一月下旬 兵庫県神鍋 近畿スキー選手権大会

参加人員未定

二月二十五日二十六日 北海道札幌、全日本スキー選手権、参加人員未定

三月三日六日 北海道旭川 団体冬季大会スキー大会、参加人員未定

なお二十九年度高校より優秀な新人を加えた同部は、今冬の活躍が大いに期待される。

西洋見学

マロニエのこかげ

セーヌは流る

廣瀬 捨三

(パリ通信)

九月二十八日ローマよりパリに向いました。昨日まで夏服でしたが、かねて聞いていたので、冬服でパリ空港着。成程小雨が降つて寒い。私は国を出て以来六、七、八月と三カ月一滴の雨も降らない、かんかんの夏の日照り、九月になつて漸くアテネで一回、フィレンツェで二回夕立にあつただけで、これまた秋とはいえ、まだかんかんの日照りの中から急にこう寒いところへ来て、古びた建物の屋根に窓が突き出て、煙突の沢山あるのを見て、イスタンブールを思い出し、セーヌ河やエッペル塔を眼前に見乍ら、何んだか北国の田舎町へ着いたような感じでした。

二十九日、三十日とまだ曇つた空から時々雨が降り寒く、凱旋門、インヴァリッド寺、パンテオンと見ましたが、いづれも石が黒ずんで汚なく(パリ人はこれが落着きがあつていいというそうです)、でかいばかりで何の風趣もありません。インヴァリッド寺のナポレオンの石棺の無趣味なこと、イスタンブールにあつたアレキサンダーの石棺と称するものと較べて嘆息しました。パンテオンにはシャヴァンヌの名画もある

が、中はみすぼらしく、地下の名士の墓所にいたつてはまるで刑務所です。一室に六人入れてあり、入口に名前が彫りつけてあつてまだ這入れる余地のあるものもあります。これでは石燈籠にペンキを塗るアメリカさんばかり嗤つておれないですね。アテネでも祭日の夜にはパルテノンに照明をつけていましたが、その無惨な姿をまざまざと見せ

つけられて、なくもがなと思ひ、西洋人は大分審美眼がわれわれとは違うようです。十月になつてから晴れた日も多く暖くなりました。モンマルトルのサクレ・クール寺はまたこれだけにやに白くて、中の色ガラスが見られる程度です。このモンマルトル界隈はちやちやと、何処がよいのか町角などで、カンヴァスを据えて描いています。それではとノートル・ダム寺院を見に行きますと、これまた下部は黒く、よごれたお菓子の砂糖細工のようです。ゴシック建築は小生憧れていたのですが、実物を見てがっかりしました。内へ入つて色ガラスだけは奇麗です。

私はイタリー各地を巡つて教会の外観や内部の立派なことや、ルネサンス期の絵画彫刻をふんだんに見てきて、すっかりイタリーに心酔してしまつた直後のこととてこうなつたのでせう。

ルーヴル博物館(この建物も黒くなっています)のギリシヤ・ローマ彫刻部でも見られるものは、パルテノンのメトープ一つと浮彫の一部分、オリンピアの

ゼウスの神殿のメトープ二つ、勝利の女神像、ミロのヴィナス位のもので、後代の模造品が多い。東洋古代部のイラクのホルサバット(Khorsabad)宮殿のギルガメンなどの大浮彫や、イランのスサ(Susa)の宮殿の彩色煉瓦の浮彫はまことに素張しかつた。スサ出土のものに菊の紋章もあり、ヘイルサレムの城門にもつていました)、スサノワはスサの王だという木村鷹太郎氏の珍説を思い出しました。キプロス島アマサス(Amathus)出土の大石鉢があり、イスタンブールにもここ出土の巨大なベス神像があり、ここには余程でかい神殿でもあつたのでせうか、リマソルの少し東に当る処で、現地では現在何も見るべきものがないという観光係員の話でしたので、私は素通りしてしまつて惜しいことをしました。又ここは一説によると獅子心王リチャードの上陸地点ともいわれています。又イエルサレムの「諸王の墓」と称する洞窟出土の石棺などここにあり、私は現地を見ているので興趣一沙で、いたく近東へのノスタルヂヤを感じました。

キリスト生誕、エジプト逃避行、ゼツセマノの園の祈り、キリスト処刑、ラザルスの復活などの絵画、モザイク、テラコッタの浮彫はイタリに無数にあり、なにしろ私は実地を見ているから一層興味もあることゝ思います。しかしルーヴルの絵画彫刻部でも、やはり光っているのはイタリー、ルネサンス期のものです。日本の片隅で西洋の中世紀などに今まで憧れていたのが馬鹿らしくなつてきました。かうした見方の変つてきたことも今度の海外研究の大きな収穫かと思ひます。

その中世紀、七世紀から十二世紀の写本の展覧会が当パリのビブリオテーク、ナシユナルで今やつており

まして、これは主としてその写本の挿絵を見せる為に陳列されています。これも今まで僅かに写真の複製を見て有難がついていたのですが、実物を見ると幼稚な絵で、トルコ、エジプトで見たアラビヤ語の写本同様こんなものかと思う程度でした。イタリーのヴェネチヤではマルコ・ポーロ七百年記念に地誌類の古写本、古地図の展覧会がありました。

こんなわけで小生折角皆さん憧れの(?)花のパリにおつても、心は未だ近東からギリシヤ、イタリーをさまよう始末。これではいかん、パリの生活も味わねばと思うのですが、ここは酒以外は何んでも高い。小生には苦手です。フランスに来て葡萄酒位飲まねばと、一度注文したのですが、とても飲みきれません。諦めて紅茶にしています。シャンゼイゼの映画館でチャップリンの「モダン・タイムズ」をしていましたから、これでも見てやれと思うと三・五フラン(約三・五円)。まあパリ人と一緒に笑つて愉快でした。殊にこの音楽はイエルサレムやローマのホテルのバンドが奏していて、これを聞き乍ら庭園でレモン水を飲んだり、屋上で夕食をしたことを思い出しました。懐中電灯を持つた案内嬢にチップを皆やつています。私は先の人がやらなかつたので、それにならいました。明るくなつて周囲を見廻すと老人夫婦が多い。若い者は何処へ行つてゐるのかしら。

パリへ来て黒人やインドシナあたりの人の多いのが目立ちますが、黒人と白人の女が手を組んで歩いているし、到る処で若い男女がキッスしているまではよいとして、私のような外国人とみると、所謂フレンチ・フットをちらちら見せて、買わないかとよつてくるのは、旅情を慰めてくれるのか知らんが、文化水準はエジプト並みですな。私は又万年筆でもすられはしまい

かと、こんな魚雷はよけて通ります。

当地で勉強しておられる本学講師の高塚洋太郎さんの御世話で、十月十一日オペラ座へ二人でリゴレットを見に行きました。小生日本にいても歌舞伎座なんてまだ行つたことのない男、オペラのよしあしは兎や角申しませんが、その座席たるや高塚さんが虎子と喧嘩して買つたというひどい席で、三階正面ですが、定員八名の小室へ十一名も詰込まれて、前の座席と水平ですから、舞台なんか見えません。小生は体を体操の時



(セーヌ河畔にて)

のように四十五度横へ傾けて見ると、高塚さんやまだ後にいる三人の婦人は立つて見る始末。見えない座席に金を取るなんて怪しからん。しかも手洗いにいくと、女の番人がチップを要求する。ヨルダンやエジプトがガイド乞食の国なら、ここはチップ乞食の国です。パリのよき時代も昔の話。オペラ座にかくの如し。

当地では宮島綱男理事紹介のフェリシヤン・シヤレー先生(Prof. Félicien Challaye)宅を十月四日訪

問。十月九日晚餐の招待をして下さる。私などのまだ生れない明治時代に三度日本へ来られた由、奥さんはパリの町は隅なくその来歴から知つてゐるが、ルーヴルはこの数十年行つたことがないとの事。

私は九月五日ローマへ着いた夕方、早速ボルゲーゼ大公園を散歩してみ、これからだんだん文明国になつてくる、よくぞ西廻りにしたものだ、嬉しくなつてきました。しかし国を出る時堀先生に一度胸、二に健康、三に語学と教えられたのですが、小生近東で鍛えた度胸も、パリでは使うに由なく、拍子抜けの体で、却つて近東、ギリシヤ、イタリーの旅を今更年になつかしく思い、こんな拙文になつた次第。読者何卒あしからず。

健康にも小生至極恵まれ申分なく、語学の点は、小生日本語も口数の少ない方で、況んや外国語はべらべらとは尚更ゆきませんが、今までバルバロイ(Barbaroi)の国ばかり巡つてきたが、さして不自由は感じませんでした。

しかしそれらよりももっと大切なもの(或いはこれが一番大切でせうが)が心細くなつてきて、秋風と共にこたえてきました。孫悟空は一たび呪文を唱えて筋斗雲に乗れば、またたく間に数十万里飛びますが、地上へ降りて困ると、いつも観音大士に助けを求めますが、小生そんな便利なパトロンのないで、今後は専ら筋斗雲の御世話になつて鵬翼万里早廻りします。

明後十月十四日早速呪文を唱えてロンドンへ飛びます。高木先生もう御出発なされたとのこと。ロンドンでお会い出来るでせう。故国の皆様御機嫌よろしく(昭和二十九年十月十二日、フランス、パリ、ホテル・バルティモアにて記) (文学部教授)

学生就職中間報告

茲數年來毎年の不況下に於て最も憂慮せられた卒業生の就職の問題も各方面の理解と大学各機関並に学生自身の異常な努力によつて予期以上の成績を収めてきたが、さて今年はどうであらうか。業界の不況は愈々深刻といわれており、これと密接不離の關係にある就職戦線に今年は相當な困難が予想されてゐた。

このような情況下に本年も昨年と同様卒業生の推薦は全国一斉に十月一日（国立大学の一部は十月十五日）から蓋を開け、目下深刻激烈な就職戦が展開されつつある。ここで茲一ヶ月余の本學の状況を簡単に中間報告する。

求人申込は推薦期日統一の關係もあつて最初の滑り出しは好調であつたが、現在では一流会社からの求人が一応終ると共に漸次緩慢となつてきている。十一月十日現在の求人件数は一一〇件であつて、昨年の同期に比べて三五件の減少となつてゐる。これを業種別に大別すると次の通りである。

業種	件数
金融	21
保険	15
証券	5
証券	7
証券	5
証券	7
証券	13
証券	3
証券	6
証券	2
証券	15
証券	9
証券	2
計	110

右一一〇件の中試験を完了し既に採用者を決定した会社は約半数の五四社であり残りは五六社でその中試験は済んだが採用者をまだ決定していない会社が一六社、入社試験未済が四〇社である。

現在までに本學の主なる採用決定会社を挙げると、

勸業銀行 百十四銀行 東京鐵道管理局 山一證券 大和証券 八幡製鐵 日米石油 幸福相互銀行 奈良交通 千代田生命 鐵道紡績 安田火災 久保田鐵工 日本アセテート 野村証券 江口証券 才一製藥 日本生命外七社

（十一月十日現在）

であり昨年の同期に比べて会社数に於て半減し、採用決定者は半数を稍下廻る状況である。

本年は一般的に詮衡期日が遅れている傾向はあるけれども、本年度卒業見込者二千五百名（内就職希望者一三五〇名）を抱えて洵に憂慮すべき状態である。

緒戦で今年はこのような結果であるが、この原因は殆んど一流会社が大学卒業生の採用枠を昨年より著しく減らした結果であろう。恐らく計画人事可能の大会社の採用人員は昨年に比べて平均五〇％内外減少しているのではないかと想像せられる。

今年度の一流会社の採用方針は昨年と大差はない様だが、最後の線で多少縁故に支配された傾向が覗われないで

もない所が一部に感ぜられたことは遺憾である。先づ各社共思想と健康は大前提であり、特に思想傾向に關しては、詳細な調査のあとが感取せられる。次は學業成績である。平素の成績が参照せられることは無論であるが、多数の応募者の中から將來の幹部要員として極めて少數の者を厳選するには何といつても筆答試験が第一に重視せられることは論を俟たない所である。

筆答試験では、論文（作文）の外に一般教養科目、特に語學が重視された。語學のために不覺をとつた學生が、本學に多かつた様に見受けられる。また學業と併行的に、或はそれ以上に徳性にウエイトをかけていることは當然である。明期にして素直であり、學生らしい品位の保持者が求められ、スポーツマンで學業成績のよい者という条件付のものが相當多かつた。

前述のように現在迄に大会社への進出は予想以上にぶく、この後と雖もあまり多くを期待することはむずかしい。今日わが國で払込資本金一億円以上の所謂大会社は僅かに五百數十社にすぎないとされているが、之等の会社が改めて採用の枠を拡げない限り全国十三万人の新制大学卒業生中これ等に就職出来る人数は極めて少數にして、ここから閉め出された學生は好むと好

まざるとに拘らず中小企業に職場を求めざるを得ないことになる。従つて中小企業への進出の競争は益々その激甚さを加えるであらう。

このように見てくれば、各大学の就職戦線の大詰は結局中小企業の場合に行はれることになる。従つて大学当局は、これを有利に展開すべく最善の努力を払うべきは勿論であるが、學生も現在の中小企業の立場をよく理解認識し、自らも積極的に自己の進むべき職場を開拓し、中小企業の地位の向上と繁榮のために進出する覚悟を固める必要がある。

（就職課長心得 山影耕作記）

本年度司法試験合格者（司法修習生）

廣岡 保	（昭和二十五年三月 法二卒）
大川 立夫	（昭和二十七年三月 法一卒）
清水 賀一	（昭和二十七年三月 法二卒）
宮地 英雄	（昭和二十七年三月 法一卒）
西村 登	（昭和二十七年三月 法一卒）
佐藤 正夫	（昭和二十八年三月 法二卒）
鈴木 芳一	（昭和二十八年三月 法二卒）
砂山 一郎	（昭和二十八年三月 法一卒）
山内 丹	（昭和二十九年三月 法二卒）
岡 次郎	（昭和三十年三月 法一卒）



校友 バンチ

校

友

大阪支部秋季総会

大阪支部秋季総会は十一月二十三日（勤労感謝の日）を期し、泉州牛滝山の観楓と決定、当日は晴天に恵まれ、午前十時南海難波より岸和田観光バスに乘車、車中ウグイス嬢より滑道の由緒ある古蹟、名所の説明を受けて興味満喫、新装なれる岸和田城の外廓を経て、牛滝山飯治楼に着いたのが正午過ぎであつた。会場前の



大阪支部秋季総会

錦繡織りなす溪谷を逍遙すること暫し、記念撮影の後懇親会に移り、中務支部長の支部現況報告に続いて、母校白川理事長の挨拶あり、余興を觀賞しつゝ開宴。歓を盡して午後四時帰路についたが、車中ノド自慢を開演、爆笑に次ぐ爆笑で六時散会した。

出席者

大学側

白川理事長 久井専務理事 矢野常務監事
米 資 辻野岸和田支部長

会員

梅原貞治郎 海野 円城 江里口春志
岡本 重治 織田佐代治 榎本 信雄
金本 朝一 岸本 芳夫 小林 昶
坂本 龍夫 下条小野右衛門 淡川 鶴蔵
関 豊馬 段林作太郎 竹沢喜代治
多賀谷 宏 田中 一郎 長柄 金吾
中務 平吉 西本 寛一 長谷川清一
松本芳太郎 森下 尊雄 山崎 敬義
山根 滝蔵 八木万太郎 大和 英雄
吉村 種蔵 米田 恒治 安井 章吾
土橋 四三 秋山 剛 後藤 寿昭
大西寿美子

関西大学剣友会総会

剣道部先輩の組織する関西大学剣友会は十一月七日午後一時より、宗右衛門町大黒屋本店に於て、第四回総会を開催。総会に先立つて、南警察署道場に於て現役との交歓稽古を行い、後総会に入り、会計報告、役員改選他三件を審議。席上出席者一同睦しく懐旧談に華を咲かせ八時盛會裡に散会した。尚総務以下全役員の留任を満場一致で可決した。



関西大学剣友会総会

出席者

松田 啓教授 広岡英雄教授
吉田誠宏講師 野元 喜蔵氏
奥野 忠夫 田中 武男 大野 幸雄
安田 経彦 坂口 昇 弘末 正彦
名剣 要一 福崎 月夫 萩原 芳三
熊田 忠雄 苗代 隆盛 大石 昭
源辺 一郎 深山 仁臣 片山 富正
剣道部現役（新旧役員一同）

貝塚支部総会

十二月五日午後一時より貝塚市水間松葉温泉に於て貝塚支部総会を開催、当日は冷雨の深山を満喫して旧交を温め午後六時半学歌を高唱散会した。

当日決定した事項

1、貝塚支部の慶弔規程
2、一月二十三日（日）午後二時より貝塚市公会堂に於て母校経済学博士森川太郎先生の英米帰朝講演会開催。
演題「世界状況と日本経済の針路」

出席者

大学側
出席者

双竜会総会

十二月十一日午後五時より阿倍野燎泉閣で双龍会総会を開催。母校より河村宜介教授。安井校友課長が来賓として出席、坂本氏の司会に依り開会。温情溢るゝ河村教授の挨拶、安井校友課長より母校の近況の報告があつた。続いて出席会員各自の近況と痛快な在学時代の想い出話、余興も次々行はれ、盛會裡に散会。

安井校友課長

支部側

北村 専一 菅原 正治 泉谷 与一
平沢 農一 松本 勇 西 二郎
渡辺 忠男 原田 満 梅田伍一郎
森田 芳郎 南 重治 池之内三郎



双龍会総会

出席者

河村宜介教授 安井校友課長
波田野福雄 丸尾 実 松下 由道
山形 貞男 岡本 重俊 辻 忠勝

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいただきました。昨年十二月三十一日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和三十年一月

学校法人 關西大學

關西大學七十周年記念

拡充資金寄附者芳名 (十二)

昭和二十九年十二月三十一日現在 (順序不同、敬称略)

一、篤志家の部 (才十回)

金壹万円也 關西大學滋賀県人会

計 金壹万円也

二、關係業者の部 (才十一回)

金九拾五万円也 大阪城口研究所

金拾万円也 株式会社ナニワ印刷所

金壹万円也 渡辺文具店

金五千元也 フロア一商会

計 金七百五拾参万九千五百円也

三、校友の部

1 地方支部

金五千元也 日本出版印刷株式会社

金五千元也 沢田 勇夫

金参千元也 梅田 茂

計 金八千円也

口 明石支部 (才二回)

金壹千円也 田中 功

金壹千円也 岡田 芳夫

計 金四万九千円也

金参百六拾参万四千五百円也

2 同期会

金貳万五千元也 有賀司郎 (才一五回)

金七拾四万円也

計 金四拾七万八千円也

金貳万円也 保井 剛一

金壹万円也 内田 修

金壹万円也 大銅 次郎

金五千元也 森 正治

金参千元也 高見 壽彦

金貳千円也 砂田 光律生

金貳千円也 西野 義輝

山下 重彦

堂浦 丈夫

森本 詢爾

平島 茂雄

麻植 信喜

田淵 福雄

中野 久

北川 由藏

戸部 富雄

四井 智夫

二森 義規

金壹千円也 敏明

計 金七万参千円也

二 双竜会 (昭十四専卒) (才二回)

金壹万円也 岡本 重俊

金壹千円也 松下 由道

金壹千円也 山形 貞男

計 金壹万貳千円也

金六万六千円也

水 喜楽会 (昭十五専卒) (才一回)

金壹万五千元也 鉄井良男

金参千円也 太田 正孝

山下 重彦

堂浦 丈夫

森本 詢爾

平島 茂雄

麻植 信喜

田淵 福雄

中野 久

北川 由藏

戸部 富雄

四井 智夫

二森 義規

金壹千円也 敏明

計 金七万参千円也

二 双竜会 (昭十四専卒) (才二回)

金壹万円也 岡本 重俊

金壹千円也 松下 由道

金壹千円也 山形 貞男

計 金壹万貳千円也

金六万六千円也

水 喜楽会 (昭十五専卒) (才一回)

金壹万五千元也 鉄井良男

金参千円也 太田 正孝

永田規矩夫 (大6 専法)

松村源次郎 (昭2 専法)

岡田 実之 (昭13 大経)

樋口 哲四郎 (大2 専法)

本多 直重 (昭26 工専)

高野 時治 (大3 専法)

長井 辰式 (昭16 専法)

杉山 利治 (昭21 大法)

中井 正王 (昭14 専二法)

三宅 敦 (昭27 学経)

則武 亨 (昭24 学経)

金貳千円也 牧野 政一 (大5 専法)

金壹千円也 山野 井幸男 (昭17 大商)

金壹千円也 二宮 達 (昭28 学経)

金壹千円也 松本 市松 (昭14 専法)

金壹千円也 岡田保之助 (昭8 専法)

金壹千円也 藤崎悦二 (昭8 専法)

金壹千円也 本田 一郎 (昭13 専法)

金壹千円也 戸田 陽秋 (昭6 専法)

金壹千円也 間 邦威 (昭16 大法)

金壹千円也 橋田 東一 (昭9 大法)

金壹千円也 江見 良孝 (昭12 大法)

定藤 豊 (昭10 専二法)

金壹千円也 叔井 一昭 (昭11 大法)

金壹千円也 正木 佳雄 (昭5 専法)

金壹千円也 岡井 盛治 (昭2 専法)

金壹千円也 大塚 美 (昭10 大法)

金壹千円也 前田 鶴林 (昭6 専商)

金壹千円也 友弘 敏彌 (昭8 専法)

金壹千円也 西崎作太郎(昭5 大法)
金壹千円也 内藤 幸夫(昭27学一法)

計 金九万七千円也

累計 金八拾貳万八千五百円也

累計 金九百八万七千五百六拾円也

四、教育後援会の部

金貳万円也 奈良 三郎
金壹万円也 坂本 長作
金壹万円也 堀口也壽次
金壹万円也 山下石太郎
金壹万円也 松村 榮枝
金壹万円也 毛尾金三郎
金壹万円也 国崎 裕
金七千円也 勝野 種松
金五千円也 生田 健一
金五千円也 近沢 室一
金五千円也 橋本虎治郎
金五千円也 河合藤十郎
金五千円也 木原 九市
金五千円也 保田 正和
金五千円也 井村 震一
金五千円也 高谷 鹿藏
金五千円也 出水 巖
金五千円也 吉田 藤吉
金五千円也 西村 善一
金五千円也 渡壁 松一
金五千円也 下山村 敬夫
金五千円也 野村 忠敬
金五千円也 山田伊三郎
金五千円也 守部 治一
金五千円也 北尾 泰三
金五千円也 白神 恒夫
金五千円也 川本 憲治
金五千円也 老松 常吉
金五千円也 寺崎 文二
金五千円也 新甚 清藏
金五千円也 難波 平八郎
金五千円也 柏原 精三
金五千円也 松尾 貞治郎
金五千円也 波部 靖

金貳千円也 千草正治郎
金貳千円也 公江 貞雄
金貳千円也 西本 秀吉
金貳千円也 足立幸太郎
金貳千円也 村田治三郎
金貳千円也 南出 健一
金貳千円也 酒井彦太郎
金貳千円也 稻葉 昌幸
金貳千円也 執行 正俊
金貳千円也 水谷 清次
金貳千円也 野村 孝
金貳千円也 飯盛 幸雄
金貳千円也 北阿 刻夷
金貳千円也 今西幸治郎
金貳千円也 横山喜三郎
金貳千円也 田中己三郎
金貳千円也 北出 清弘
金貳千円也 清水 藤馬
金貳千円也 末吉 一巳
金貳千円也 中筋 正夫
金貳千円也 山本 綏次郎
金貳千円也 坂口 惣平
金貳千円也 中野利三郎
金貳千円也 金子 直一
金貳千円也 新家 茂実
金貳千円也 伊藤 鉄造
金貳千円也 行江 好彰
金貳千円也 橋本 好逸
金貳千円也 江島角太郎
金貳千円也 朴 鳳守
金貳千円也 飯坂 寅一
金貳千円也 浦田 寅一
金貳千円也 松本庄太郎
金貳千円也 北中 勇吉
金貳千円也 辰巳 省三
金貳千円也 赤松 喜一
金貳千円也 藤原 二男

金壹千円也 山之上市郎
金壹千円也 藤岡 安吉
金壹千円也 内藤 静
金壹千円也 日笠清太郎
金壹千円也 田中 清二
金壹千円也 石井 忠興
金壹千円也 上野留次郎
金壹千円也 福島 利夫
金壹千円也 服部 信子
金壹千円也 河野 晴一
金壹千円也 西本 岩吉
金壹千円也 西村 久藏
金壹千円也 大柴 信夫
金壹千円也 鈴木 良夫
金壹千円也 渡辺 六明
金壹千円也 松久保辰藏
金壹千円也 堀尾 政雄
金壹千円也 福島 聚
金壹千円也 川岸 一郎
金壹千円也 八木 正一
金壹千円也 前川 常吉
金壹千円也 稻葉 幸市
金壹千円也 真下百之助
金壹千円也 中村 政一
金壹千円也 多田 敬二
金壹千円也 大河内豊城
金壹千円也 久保谷由美
金壹千円也 横田 輝夫
金壹千円也 岸田 年彦
金壹千円也 石見 研二
金壹千円也 大西辰五郎
金壹千円也 高橋 英雄
金壹千円也 野口 忠二
金壹千円也 田中 福藏
金壹千円也 小合 雅美
金壹千円也 柳下 幾太郎
金壹千円也 塚由 石藏

金壹千円也 田井戸信太郎
金壹千円也 田中 九一
金壹千円也 吉村卯三郎
金壹千円也 中野 伝
金壹千円也 中元 順一
金壹千円也 杉本 榮吉
金壹千円也 増田忠太郎
金壹千円也 森 清真
金壹千円也 木野市太郎
金壹千円也 脇田 修
金壹千円也 吉久 米一
金壹千円也 青木彌太郎
金壹千円也 川口惣太郎
金壹千円也 森 末吉
金壹千円也 山口角太郎
金壹千円也 深尾 政雄
金壹千円也 杉本 岩吉
金壹千円也 木本 静広
金壹千円也 和田 久雄
金壹千円也 秋田 憲三郎
金壹千円也 小郷 梢次
金壹千円也 藤原久之吉
金壹千円也 浅井亀太郎
金壹千円也 樋口多美爾
金壹千円也 和田 一夫
金壹千円也 岡 勇
金壹千円也 平野千太郎
金壹千円也 大保利平
金壹千円也 值橋仙太郎
金壹千円也 奥井巴之吉
金壹千円也 宮田 辰造
金壹千円也 荻田芳太郎
金壹千円也 林 善三郎
金壹千円也 山本 清成
金壹千円也 石崎 清造
金壹千円也 桐山熊太郎
金壹千円也 小池 武

金壹千円也 大谷常次郎
金壹千円也 花園さと
金壹千円也 浅香重造
金壹千円也 宮風利一郎
金壹千円也 小川喜太郎
金壹千円也 藤田宗次郎
金壹千円也 木村次賢次
金壹千円也 山田和七
金壹千円也 花園勇
金壹千円也 深阪馨
金壹千円也 莊所達司
金壹千円也 田中孝三郎
金壹千円也 山村伊太郎
金壹千円也 片山定太郎
金壹千円也 南条芳夫
金壹千円也 大森章二
金壹千円也 高瀬守
金壹千円也 平塚甚右衛門
金壹千円也 山田鐵吉
金壹千円也 近藤藤緒
金壹千円也 多田照夫
金壹千円也 西浦巖
金壹千円也 江川房一
金壹千円也 山本重正
金壹千円也 田中トヲ
金壹千円也 森勘次
金壹千円也 岡田種次郎
金壹千円也 坂井三郎
金壹千円也 浅野豊行
金壹千円也 大城一増
金壹千円也 奥村源
金壹千円也 大竹善一
金壹千円也 坂野重守
金壹千円也 高野准
金壹千円也 大野繁
金壹千円也 竹内亀
金壹千円也 吉田茂
金壹千円也 吉田米造

金壹千円也 宮下清八
金壹千円也 増井良治
金壹千円也 荒木嘉三郎
金壹千円也 清瀬研二
金壹千円也 酢屋久一
金壹千円也 近藤義雄
金壹千円也 植野己代治
金壹千円也 常松竜造
金壹千円也 向田夏彦
金壹千円也 城村理吉
金壹千円也 清水浅太郎
金壹千円也 藤本清鉄
金壹千円也 佐瀬憲治
金壹千円也 西慶治
金壹千円也 上野米知夫
金壹千円也 田中重太郎
金壹千円也 南英二郎
金壹千円也 岡本昌子
金壹千円也 河本彌五助
金壹千円也 土江次子
金壹千円也 島田昌子
金壹千円也 福島嘉一
金壹千円也 和田常作
金壹千円也 山根杉松
金壹千円也 白丸光三
金壹千円也 坪田春枝
金壹千円也 兼田茂
金壹千円也 伊達佐平
金壹千円也 岸秀夫
金壹千円也 山下莊太郎
金壹千円也 杉本吉亀
金壹千円也 村川与物平
金壹千円也 大石利一
金壹千円也 牛田三郎
金壹千円也 横井清治

金壹千円也 枝松安太郎
金壹千円也 左地よね
金壹千円也 尾上龜一
金壹千円也 藤波雅孝
金壹千円也 北川忠一
金壹千円也 飯岡留太郎
金壹千円也 富井つや子
金壹千円也 田村宮藏
金壹千円也 安達勘三
金壹千円也 野村慶二郎
金壹千円也 佐伯引一
金壹千円也 岸根貞子
金壹千円也 坂東長吾
金壹千円也 系数孝清
金壹千円也 守屋高恒
金壹千円也 田原徹雄
金壹千円也 国井淳二
金壹千円也 小玉茂
金壹千円也 森嘉松
金壹千円也 大森良隆
金壹千円也 久松勝
金壹千円也 城島竹松
金壹千円也 生島助治
金壹千円也 米原和造
金壹千円也 宮垣勝之
金壹千円也 福田次作
金壹千円也 川口和平次
金壹千円也 吉田慎吾
金壹千円也 阿部定一
金壹千円也 石浦伊三男
金壹千円也 富尾康
金壹千円也 橋岡熊四郎
金壹千円也 恩地誠之助
金壹千円也 宮川精一
金壹千円也 枝広悟
金壹千円也 中村平治郎
金壹千円也 頼内国二
金壹千円也 小寺正美

金壹千円也 森田義治
金壹千円也 藤条聰一郎
金壹千円也 木村敬二
金壹千円也 宅幸夫
金壹千円也 田淵幹二
金壹千円也 山村仲造
金壹千円也 山下安三
金壹千円也 木本徳太郎
金壹千円也 尾形省三
金壹千円也 杉田初太郎
金壹千円也 山本藤三
金壹千円也 中谷源藏
金壹千円也 長谷定義
金壹千円也 田仲宙二
金壹千円也 大山橋次郎
金壹千円也 北本省雄
金壹千円也 山本留三郎
金壹千円也 塩崎善一
金壹千円也 伊川安太郎
金壹千円也 今井栄助
金壹千円也 宮原広告
金壹千円也 田中繁三
金壹千円也 小林松之助
金壹千円也 佐竹幸好
金壹千円也 山根珊三
金壹千円也 原井鉄次郎
金壹千円也 森幸一
金壹千円也 細規茂治
金四拾六万六千六百円也
金九百参拾七万七千七百円也
五、學校法人關西大學の部(才九回)
評議員
金壹万四千円也 松村睦鴻(才一三回)
計 金壹万四千円也
累計 金壹万四千円也
六、事務職員の部(才六回)
計 金貳千円也 安藤 武夫
累計 金貳千円也
(16頁三節目に続く)

關西大學創立七十周年記念 擴充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律學校として開校したのでありますが、爾來六十有餘年校友先輩の苦心と不斷の努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一万數千の學徒を擁する私學の雄として、自他共に許す一大學園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、國家社會の進運に大きな寄与をなしたことは、われわれの深く喜びとするところであります。學園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く獨立國家として出發しましたが、國家の前途は甚だ多難であります。わが國は今後、文化國家として世界文化に貢獻すべきであります、またそれによつて友邦の信に應えなければなりません、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本學は、大學の崇高な使命を自覺すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその聲価を揚げて参りましたが、真理の討究、學の實化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本學が新學制に基き、各大學にさきがけて、大學院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において將來の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本學は時代の趨勢に鑑み、爰に五ヶ年計畫を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大學院、大學ホール、（經濟學部、商學部、文學部）教室の増築等は、その一環として既に竣工しましたが、なお計畫中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山^{文學部}學舎の改築、二部學生を收容するための天六學舎の増築、學生に対する施設の一部として、千里山尚志館（學生食堂、學友會部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着工準備中であります。また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には學園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大學の眞価を決する教授陣容の充實であります。二十八會計年度においては教授十名、助

教授八名、專任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相當額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充實と共に、研究用圖書の完備も大切であります、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、學舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも總額約三億円を要するのでありますが、戦後の經濟的混亂により本大學法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御贖出を仰がねばならぬ実情にあります。

大學の生命は不朽であります、學園の生々發展を希うためには、各位の學園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、學園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思ひます。各位の御賛同により本事業完成の暁には、學園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩崎 卯一
關西大學理事長 白川 朋吉

創立七十周年記念事業學舎増改築概要

一、工事費總額約三億三千五百萬元

二、工事概要

- (一) 千里山^{文學部}學舎改築（鉄筋コンクリート造）
 - 三階建 一千六百六十八坪 工費約二億六千四百萬元
- (二) 天六學舎増築（鉄筋コンクリート造）
 - 五階建 三百七十八坪 工費約三千萬元
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百萬圓
- (四) 關西大學第一高等學校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百萬元